

プライマリ・ケア臨床でみる 腰痛・手足しびれ診療最前線

編集：大鳥精司，折田純久

酒井紀典

徳島大学大学院医歯薬学研究部運動機能外科学

「腰痛」と「手足のしびれ」，どちらも困った症状だと思う。なんとも実態のつかみにくい症状であり，多くの患者が困っているにもかかわらず，診療する側も困られる症状である。本書は，すべての医療従事者が必ず一度は遭遇する，その困った症状に焦点を当てた良書である。

本書は，1つの診療科に限らず，さまざまな診療科のエキスパートからみた「腰痛」と「手足のしびれ」の捉え方を知ることができる。私自身も他科との合同カンファレンスでときおり経験するが，他科の医師またはほかの職種の方々の意見には，“ハッと”させられることがある。本書の読者は，まさしくその“ハッとする気づき”を何度も体験すると思う。

各項ごとに書かれている「ポイント」が，実に簡潔でわかりやすい。限られた文字数に込められた，その道のエキスパートの言葉は重く，核心をついている。時間のない読者は，ぜひこの「ポイント」だけでも通して読んでいただきたい。これだけで，明日からの診療は変わると思う。

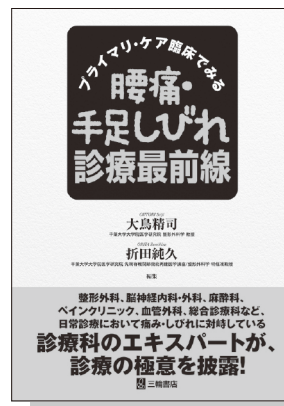
以下に本書の内容と私が感じた点について述べる。

第Ⅰ章では，「腰痛」と「しび

れ」に関する総論が述べられており，まさしくこれから診療にあたる研修医あるいは医学生にはじっくり読んでいただきたい。

第Ⅱ章では，問診をベースとした症状の捉え方や神経所見の取り方が，たくさんの図を使って述べられており，問診・理学所見がいかに重要かわかる。問診・理学所見を取ることは，診療にあたる医師としては基本的な所作であるが，画像検査を含む医療技術が発展した現在では疎かにされる傾向にあり，研修医はもちろん，ぜひ専門医の方々にも，もう一度この部分を振り返って熟読することをお勧めする。最近では，AI（人工知能）が医療に取り入れられ始めているが，いくら技術が進歩したとしても，この領域だけは“医療人の勘”が必要であろう。患者の声に耳を傾ける・身体に触れて診察することで，卓越した“医療人の勘”を養うべきである。

第Ⅲ章では，実際の症例とその対応が事細かく述べられている。著者らが，実際に経験した症例に対して，どのようなアプローチを用いて，どのように対応したのか，具体的に述べられており，薬物療法は処方内容・量まで述べられている項目もあり，非常に実践



的である。クリニックの本棚に本書が1冊あれば，非常に役立つであろう。

第Ⅳ章では，ロコモティブシンドローム，骨粗鬆症性疼痛，サルコペニアへの対策のほか，新しい画像評価法まで，今後の高齢化社会を見据えたトピックスが取り上げられている。今後，ますます研究が発展していく分野であり，10年先を見据える方にはぜひ読んでおいていただきたい。

高齢化社会を迎え，「腰痛」と「しびれ」を抱えて受診される患者は，今後必ず増える。そのような患者は，最初にどの診療科を受診するかはわからない。すべての医療従事者にとって，対応する知識・能力が求められる症状である。本書は，多岐にわたる診療科の捉え方がこの1冊でわかる。プライマリ・ケアに関わる医療従事者にとって，まさしくバイブルとなるであろう。

●定価（本体4,200円＋税）
B5判，216頁，三輪書店